

連載 プロマネの現場から

第 79 回 『うひ山ぶみ』本居宣長の学びやう

蒼海憲治（大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ）

先日、式年遷宮を終え、新しくなった伊勢神宮にお参りしました。この 7 月に亡くなった父が、四十年来、神社の宮司をしていたこともあり、供養の意味も込めたお参りでした。

神宮のお参りの後、松阪に立ち寄りました。松阪牛で有名な松阪ですが、本居宣長が生まれ、暮した土地でもあります。この松阪には、宣長さんのお墓が 2 つあります。当時の風習にならったのでしょうか、一つは、宣長さんが住んだ家の近くの樹敬寺にあり、宣長の長男の春庭さんと背中合わせになっています。こちらのお墓は「詣り墓」の位置づけで、毎月、親族がお参りするのためのお墓であり、ここに宣長さんの遺骨は埋まっていません。

もう一つは、松阪市街から南に、車で 20 分ほど離れたところにあります。妙楽寺の駐車場に車を止め、山道を 15 分ほど歩いた山室山の山頂に、宣長さんの立派なお墓があります。こちらは「埋め墓」の位置づけであり、お墓の背後には、宣長さんが大好きだった山桜が植えられています。ここからは松阪の町、伊勢の海を望むことができ、さらに晴れた日は、富士山が見える、ともいわれています。車に乗せていただいたタクシーの運転手の方も、前回は 5 月のゴールデンウィークの時で、数か月に一度、お参りを依頼されることがある、というところなので、自分たち以外誰もいない静かな山道を黙々と歩き、宣長さんのお墓に向かって手を合わせているととても落ち着いた気持ちになりました。

宣長さんのライフワークであった『古事記伝』が完成したのは、寛政 10 年（1798）、数え 69 歳のときでした。9 月 13 日、門人たちによって完成祝賀会の宴がひらかれます。その席で、数人の弟子たちから、初学者向けの古学の入門書の執筆を、改めてお願いされました。長年『古事記伝』執筆の多忙を理由に断り続けていたのですが、ついに取り掛かり、翌月 10 月 21 日夜には書き終えてしまったといいます。それは、学究生活 40 年で得た学問の要諦をまとめたものでした。

タイトルは、『うひ山ぶみ』・・・「初山踏」つまり、「はじめての山登り」のことを指します。

以下、白石良夫氏の全訳注による『うひ山ぶみ』（講談社学術文庫）（*1）を基に、宣長さんの学問に対する心得を紹介します。

そもそも、まず、何を学ばよいか？

「いかに初心なればとても、学問にもこころざすほどのものは、むげに小児の心のようにはあらねば、ほどほどにみづから思ひよれるすぢは必ずあるものなり。」

又、面々好む方と好まぬ方とも有り。又、生れつきて得たる事と得ぬ事ども有る物なるを、好まぬ事得ぬ事をしては、同じやうにつとめても、功（いさをし）を得ることすくなし。》

《いかに初学者とはいえ、学問を志すほどの人なら、まったく無垢の子供ではないのだから、自分はこれをやりたいというものがあるはずである。

また、人それぞれに好き嫌いがあり、向き不向きもある。

好きでもないことや不向きなことをやるのでは、どんなに努力しても、その成果は少ない。

》

つまり、好きなことを学んでよい、といます。

それでは、次に、どう学べばよいのか？

《詮ずるところ学問は、ただ年月長く倦まずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかかはるまじきこと也。いかほど学びかたよくても怠りてつとめざれば、功（いさをし）はなし。

又人々の才と不才とによりて、其功いたく異なれども、才不才は、生れつきたることなれば、力に及びがたし、されど大抵は、不才なる人といへども、おこたらずつとめだにすれば、それだけの功は有ル物也、

又、晩学の人も、つとめてはげめば、思いの外、功をなすことあり。

又、暇（いとま）のなき人も、思いの外、いとま多き人よりも功をなすもの也。

されば、才のともしきや、学ぶことの晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて止むことなかれ。とともかくても、つとめだにすれば出来るものと心得べし。

すべて思ひくづをるるは、学問に大きにきらふ事ぞかし。》

《ようするに、学問は、ただ年月長く倦まず怠らず、励みつとめることが肝要なのだ。

学び方はどのようであってもよく、さほどこだわることはない。

どんなに学び方がよくても、怠けてしまつてはその成果はおぼつかない。

また、人の才能のあるなしによつて、学問の成果は異なるのだが、才のない人でも、怠けずに励みつとめさすれば、それだけの成果はあがるものである。

晩学の人でも、つとめ励めば、意外な成果を出すことがある。

勉強する時間がないと言っている人も、案外、時間のある人よりも成果をあげることもある。

であるから、才能がないとか、出発が遅かったとか、時間がないとか、そういうことでもって、途中でやめてしまつてはいけない。

とにもかくにも、努力さえすれば出来るものと心得るべきである。

諦め挫折することが、学問にはいちばんいけないのだ。》

《さて、まづ上の件（くだり）のごとくなれば、まなびのしなも、しひてはいひがたく、
学びやうの法（のり）も、かならず云々（しかじか）してよろしとは定めがたく、又、定めざれども実（まこと）はくるしからぬことなれば、ただ心にまかすべきわざなれども、・・
》

《右のようなことなので、どういった学問がいいとかは言いがたく、学び方も、絶対こうし
らしいとは決めがたいものである。
また、そのようなことは決めなくてもいいことであって、ただ本人の考えるがままにすればいいのである。》

《そは、まづかのしなじなある学びのすぢすぢ、いづれもいづれも、
やむことなきすぢどもにて、明らめしらではかなはざることなれば、
いづれをものこさず学ばまほしきわざなれども、一人の生涯の力を以ては、
ことごとくは其奥までは究めがたきわざなれば、
其中に主（むね）としてよるところを定めて、かならずその奥をきはめつくさんと、
はじめより志を高く大きにたててつとめ学ぶべき也。
然して、其余（あまり）のしなじなをも、力の及ばんかぎり学び明らむべし。》

《学問にはさまざまな分野がある。
それらのどれも大事なもの、明らかにしなくてはならないものであるから、
すべての分野を学んで精進したいと思うのはわからないではない。
しかし、一人の一生の力をもってしてすべての奥義を究めるなどというのは、
無理なことである。
そのなかで、自分の専門とすべきものを決めて、それだけは究めねばやまずと、
はじめから高い志をたてて勉学に励むべきである。
しかるのち、ほかの分野にも、できるかぎり手を伸ばしてゆけばいい。》

また、本の読み方に対する宣長さんのアドバイスはこうです。

《又、いづれの書をよむとても、初心のほどは、かたはしより文義を解せんとはすべからず。
まづ大抵にさらさらと見て、他の書にうつり、これやかれやと読みては、
又さきによみたる書へ立かへりつつ、幾遍もよむうちには、始（はじめ）に聞えざりし事
もそろそろと聞ゆるやうになりゆくもの也。
さて、件の書どもを数遍よむ間には、其外よむべき書どものことも学びやうの法（のり）
なども、段々に自分の料簡の出来るものなれば、其末の事は一々さとし教ふるに及ばず。
心にまかせて力の及ばむかぎり、古きをも後の書をも広くも見るべく、

又、簡約（つまびらか）にしてさのみ広くはわたらずしても有りぬべし。》

《また、どんな書物を読むのにも、初心のうちは、はじめから文義を理解しようとしてはいけない。

まずおおまかにさらっと見て、ほかの文献にうつり、これやかれやと読んで、さらに前に読んだものにかえればいい。

それを繰り返せば、最初に理解できなかつたことも徐々にわかるようになるものだ。

さて、それらの書物を何回も読むうちには、そのほかの読書についても、また学問の方法などについても、次第に自分の料簡ができるものである。

したがって、それ以上のことはいちいち論し教えるにおよばない。

心にまかせて力の及ぶかぎり、古い文献も後世のものも広く見渡してもいいし、場合によっては簡単にして広くしなくてもいい。》

このことについて、さらに解説が付されています。

《初心のほどは、かたはしより文義を云々。

文義の心得がたきところを、はじめより一々に解せんとしては、

とどこほりてすすまぬことあれば、聞えぬところは、まづそのままにて過すぞよき。

殊に世に難き事にしたるふしぶしをまづしらんとするは、いといとわろし。

ただよく聞えたる所に心をつけて、深く味ふべき也。

こはよく聞えたる事也と思ひて、なほざりに見過せば、

すべてこまかなる意味もしられず、又おほく心得たがひの有りで、

いつまでも其誤りをえさとらざる事有る也。》

《文意の解しがたいところを、はじめからひとつひとつ解き明かそうとすると、滞って先に進まないことがある。

そんなときは、不明なところはそのままにしておいて、先にすすめばいい。

難解なことをまず知ろうとするのは、たいへんよくない。

平易なところにこそ心をつけて、ふかく味わうことをしなくてはならない。

わかりきったことだと思って、いい加減に見過ごせば、微妙な意味が感得できず、

さらに間違って解釈していても、その誤りにいつまでも気がつかないものである。》

具体的な事例としては、宣長さん自身の読書経験として、『玉勝間』巻二の「おのが物まなびの有りしやう」にこうあります。

のちに先生となる賀茂真淵の『冠辞考』が江戸で出版され、知人から見せてもらい、はじめて

名前を知る。

この本を初めてひととおり読んだときは、まったく思いもかけぬことばかりで、あまりに意外で、奇妙な感じがした。

なかなか納得できなかつたけれども、もう一度読み返してみると、なるほどと思われる箇所もでてきた。

さらに、また読み返すと、いよいよ納得できるところが多くなり、読み返すたびに、納得する気持ちが増して、ついには、それが真実だと思うにいたる。

《すべて学問は、はじめよりその心ざしを、高く大きに立てて、
その奥を究めつくさずはやまじと、かたく思ひまうくべし、
此志よわくては、学問すすみがたく、倦（うみ）怠るもの也、》

《すべての学問は、はじめからその志を高く大きくして、
その奥義を究めつくさずばやまじと、かたく心しなければならぬ。
そうでなくては、学問はすすまず、怠り心が出るのである。》

以上、『うひ山ぶみ』で宣長さんが示した学び方をここまで紹介してきましたが、宣長さんの本心は、このような研究方法がそのまま万人に役に立つとは決して思っていなかった、と小林秀雄さんが指摘しています。

《宣長さんにね、『ういやまぶみ』という有名な文章があります。

これは学問の学びようですねー方法論です。

学問というのはこういうふうにしてやりなさい、それを書いた本です。

そこには中々面白いことが書いてありますから、みんな研究の方法論だと思って引用して色々と論じています。

ところがね、宣長さんは本当はそんなことちつとも言いたくないんですよ。嫌々言ってるんです。

何故宣長さんがこれを嫌々言ったか、ということを読み落としたならば、この『ういやまぶみ』は読んだってしょうがないんですよ。

『ういやまぶみ』の一番しまいに、こういう歌が書いてあります。

<いかならんういやまぶみのあさごろもあさき裾野のしるべばかりも>

「いかならん」、どうであろうか。

「ういやまぶみ」、このういやまぶみという言葉はね、行者の言葉ですね。

行者が山に登って修行するでしょ。その初めての登山です。

「あさごろも」は麻の着物だ。その頃は古いことだからね、木綿の着物なんかありやしませんよ。みんな麻衣着て、山に登ったんだ。

そういう麻衣の「あさ」にかけて「あさき裾野のしるべばかりも」。

私の書いたことは本当に浅い、ういやまぶみの裾野のことをちょいと書いただけなんだ。だけど「いかならん」、こんなことはどうであろうか、と。

そういう歌を書いているんです。≫（*3）

勉強法をどうこうするよりも、倦まず弛まず取り組むことこそ肝要なのだ、と。

宣長さんが師の賀茂真淵との出会いは、『玉勝間』の「あがたみのうしの御さとし言」に描かれています。そこでは、「世の中の物まなぶともがらを見るに、皆ひきき所を経ずて、まだきに高きところにのぼらんとする程に、ひききところをだに、うることあたはず」、つまり、「低き所」を固めずに、「高き所」を求めようとしてもダメだ、と指摘されています。

現在は、子供向けに多数読み物のある『古事記』ですが、江戸時代中期に、宣長さんが読み方を決めるまでは、満足に読むことさえできない書物でした。そのため、『古事記』を読むにあたって、漢字の正確な読み方を明らかにするため、『漢字三音考』『字音仮字用格』といった書物をあらわしました。また、係り結びを発明し、五十音図を完成させました。その過程では、「を」と「お」の位置を逆転し、また、上田秋成とは、「む」と「ん」について激しい議論をしています。それらは、一見簡単なように思えますが、五百年來の懸案事項で、宣長さんによって決着がつけられたといわれています。

最後に、宣長さんが長年住んだ家は、もともと松阪市街の三井、三越、小津などの商家の立ち並ぶところにありました。現在は、日本百名城の一つである松阪城内の本居宣長記念館の隣に移築されています。

この家の二階の四畳半一間の和室が、宣長さんの書斎であり、「鈴屋（すずのや）」の屋号として有名な部屋になります。現在、この部屋に入ることはできないのですが、窓が開かれているため、外から見ることができます。床の間には、「県居大人之靈位(あがたいのうしのれいいい)」という掛け軸が掛けられています。これは宣長さんの自書によるもので、「県居(あがたい)」とは、宣長さんの師にあたる賀茂真淵の号で、賀茂真淵の命日にはかかさずお祀りをしていました。また、この掛け軸の隣に、部屋の名の由来になった「鈴」が掛けられていました。この鈴の目的ですが、眠くなると書斎の柱にかけた鈴を鳴らして睡魔を払った、それが宣長さんの集中力の秘訣であった、という説もあります。でも、実際に、記念館で、現物の大振りな鈴を見てみるとその説明は無理がある、と思います。ちょっと格好良すぎるかもと思うものの、田中康二さんの説明がふさわしいと思っています。

「鈴を愛した宣長は、書齋に柱掛鈴（はしらかけず）を持ち込んで床の間の脇に掛け、仕事の合間に鈴を鳴らしては心を落ち着かせていたという。

風が吹くとさわやかな音を奏でる鈴は、弟子の意見を積極的に取り入れた鈴屋の学風の風通しの良さを象徴するものだった。」（*2）

この「鈴屋」の四畳半の一室で、宣長さんは『古事記伝』他様々な研究を行いました。小林秀雄さんは、こう語っています。

「あの人は何も生涯に波乱はないんです。

伊勢の松阪にじーっとして勉強していた人ですからね。

あの人の波乱というのは、全部頭の中にあったんです。

その頭の中の波乱たるや実に面白い、ドラマティックなものなんです。」（*3）

波乱の無い生涯において、宣長さんの頭の中は大冒険をしていた、というのはとても痛快なことだと思っています。

（*1）本居宣長「うひ山ぶみ」（講談社学術文庫）白石良夫(全訳注) 2009年刊

（*2）田中康二「本居宣長」（中公新書）2014年刊

（*3）原田宗典「小林秀雄先生来る」新潮社 2008年刊所収、『小林秀雄講演 第3巻 一本居宣長 [新潮CD]』部分